



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウェーバー「世界宗教の経済倫理」のテーマについて
Author(s)	白井, 暢明; Shirai, N
Citation	基督教学, 17, 32-34
Issue Date	1982-07-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46419
Type	journal article
File Information	17_32-34.pdf



ウェーバー『世界宗教の経済

倫理』のテーマについて

白井暢明

ウェーバーの宗教社会学論集の第一論文『プロテスタントイジムの倫理と資本主義の精神』（一九〇五～一六）と後続の『世界宗教の経済倫理』（一九一七～一七）諸論文とは、その考察対象や方法においてかなり相違がある。前者が、宗教の教義的基盤から実践的生活態度（合理主義的エートス）への *psychologisch* な起動力の説明が主眼であるのに対し、後者では、西欧対アジアという比較史的視点をベースにして、より一般的に、宗教と実践倫理との *psychologisch* で *pragmatisch* な関連が追求されている。この *pragmatisch* な関連とは、具体的にはその宗教の担い手である「社会層」(*soziale Schichten*)の利害関心と宗教倫理との相互関係を意味していると考えられる。本発表は、この点を中心に、『世界宗教の経済倫理』「序論」(*Einleitung*)（一九一五）を典拠として、その基本的テーマと方法を探ろうとするものである。

「序論」の冒頭に、以下の諸論文の包括的観点が次のように述べられている。「この叙述では当の宗教の実践倫理に最も強い決定的な影響を及ぼし、かつ当の実践倫理に固有の特徴を刻印した社会層の生活態度の中の方向付与的な諸要素をその都度摘出する試みが主眼となる。」ここでいう社会層とは、例えば儒教における、文学的教養をもつ現世的・合理主義的受祿者層、初期キリスト教における都市的な遍歴職人層等々である。ウェーバーはこうした諸宗教の主要な担い手である社会層の特性とその固有の利害関心によって各々の宗教倫理の性格が少なからず規定されているとみた。しかしながら他方、彼はある宗教性の特性が、その固有の担い手である社会層の社会的状況の単純な「函数」であるとか、あるいはその階層の「イデオロギー」または、その階層の物質的・観念的な利害状況の単なる「反映」であるという主張を強く否定する（唯物史観批判）。彼によれば、宗教倫理は、一次的にはその刻印をまず宗教的源泉、即ちその宗教の告知と約束との内容から受けとる。彼のこのような考え方は、周知の次のテーゼに集約される。「理念 (*Idee*) ではなくて（物質的・観念的な）利害 (*Interessen*) が直接に人間の行為を支配する。しかし理念によって作り出さ

れる世界像はきわめてしばしば転撤手 (Weichensteller) として軌道を決定し、その軌道の上を利害のダイナミズムが行為を推し動かす。」つまり、生活態度全体の方向は、その究極的価値 (理念) によって最も強く影響されるのに対して、追求される救済財の種類は、支配的な社会層の利害状況及びこれに適合した生活態度のあり方によって強く影響されるというのである。ところでこのように救済財のあり方に影響を与える諸社会層固有の一般特性を例示すれば次のようになる。知識人層はその宗教の世界像の合理主義的体系化の担い手として重要であるが、一般的に「神秘主義」、現世逃避的・開悟的救済への傾向をもつ。騎士的戦士層の関心は全く此岸的でありながら現世の合理的克服への傾向は全く無く、運命の非合理性、決定論的宿命の思想が支配的となる。政治官僚層の場合には、宗教的義務は究極的には官職義務であるが、身分的義務にすぎず、全ゆる宗教性は儀礼偏重主義的な性格を帯びる。農民層は、その経済的な生活全体が自然に束縛され、自然の威力に依存しているために、結局は呪術に近づき易い傾向をもつ。又市民層は多義的な階層ではあるが、一般的に実践的合理主義、つまり予言と共鳴して生活の倫理的合理化へ至る可能性をもつて

いる。

ところでウェーバーによるこのような諸社会層の呈示の仕方自身の内に表われているように、彼の社会層概念は決して平面的一義的なものではなく、少くとも、二つの異ったカテゴリーが混在している。それは後にウェーバーが次のように一層明確に定義している「階級」(Klasse) と「身分」(Stand) の二つである。「身分状況とは、一次的には特定の人間集団の生活様式、即ち教育の様式上の相異によって制約された正又は負の社会的名誉のチャンスであり、階級状況とは、まず第一に経済的に重大な典型的状況(市場)によって制約された生計及び営利のチャンスのことである。」さてこのように階級的状況に基づく利害関心とは別の意味で、身分状況を基盤とする社会集団がある宗教の担い手として(即ちある種の宗教的身分編成として)成立する場合、そのあり方は当の宗教倫理の特性に大きな影響を与えることになる。特に人間のカリスマ的資質の不平等という宗教史上普遍的な経験的事実から、全ての強固な宗教はカリスマ的適性の差異に応じた一種の身分編成に向う傾向がある。これが即ち「達人宗教性」(Virtuosenreligiosität) と「大衆宗教性」(Massenreligiosität) である。

さて、この達人宗教性は本来救済財の普遍性を唱える制度的恩寵授与共同体Ⅱ教会と対立するものであるが、しかし、いずれは大衆の顧客を獲得・維持してゆくために、その要求を日常宗教性まで譲歩せざるを得なくなる。その際この譲歩がどんな形で行われるかが日常生活に対する宗教的影響のあり方にとって決定的である。例えば殆どのアジア宗教では、達人宗教性は大衆を呪術的伝統の中に放置した。又達人宗教性自体の特色も生活態度の発展に重要な影響力をもっている。つまり達人宗教性の救済財及び救済手段が瞑想的又は狂躁的・忘我的な性格をもつ場合には、達人宗教性から現世内部での実践的日常行為への通路は存在しない。逆に西欧のように達人層が世俗内生活を神の意志どおり形成することを追求する禁欲的セクテを形成した場合には全く異った(周知の)帰結が生ずることになる、このような社会層に関するウエーバー独自のカテゴリーが『世界宗教の経済倫理』諸論文の比較史的・分析にきわめて有効かつ重要であることはいうまでもない。